

フランス語の語彙の操作性とアフォーダンス

渡邊 淳也

1. はじめに¹⁾

本稿の目的は、名詞や形容詞を中心として、フランス語の語彙の特性について考察することである。フランス語の各語彙の使用可能な範囲が、後述するアフォーダンス (affordance) の概念によって画定されることが多いことを確認するとともに、意味記述にアフォーダンスを新たに適用することで、フランス語の語彙の特性がよりよく理解できることを示す。

フランス語では 17 世紀に純化主義 (purisme) の影響のもとで、思わしくないと判断された単語が人為的にとりのぞかれ、語彙が大幅に減少した。この影響は現代にも残っており、この時期に削除されたままの語も少なくない。²⁾ フランス語は、少数の基礎語彙をくりかえし使うことをいとわず、だれにでもわかりやすい「明晰さ」(clarté) を志向するという特徴をもつ。

頻度の高い順で数えて 1000 語、2000 語、3000 語... などの数の語が、一般的なコミュニケーションで用いられる語彙のなんパーセントを占めるか (この割合を「カバー率」という) について、各言語での調査をまとめた占部 (2011) によると、つぎの表 1 のような対比が成り立つ。

表 1: 語数とカバー率 (占部 2011, p.81 による)

語数	英語	フランス語	スペイン語	中国語	朝鮮語	日本語
1000 語	80.5 %	83.5 %	81.0 %	73.0 %	73.9 %	60.5 %
2000 語	86.6 %	89.4 %	86.6 %	82.2 %	81.2 %	70.0 %
3000 語	90.9 %	92.8 %	89.5 %	86.8 %	85.0 %	75.3 %
4000 語	92.2 %	94.7 %	91.3 %	89.7 %	87.5 %	データなし
5000 語	93.5 %	96.0 %	92.5 %	91.7 %	89.3 %	81.7 %

フランス語は、語彙を減らした代償として、ひとつの語の守備範囲が広くなり、多義語 (polysème) が多くなった。フランス語の「明晰さ」は、全般に抽象志向や操作性と表裏一体であるといえる。

2. 外在的特性

まず、Cadiot et Nemo (1997) の論旨に沿って、名詞 client について考えてみよう。

- (1) [記者が仲間に、政治家に関していう] C'est un **client** plutôt facile. (Cadiot et Nemo 1997, p.27)

どちらかというと与しやすい「お客さん」だよ (「お客さん」による訳は便宜的)。

- (2) [サッカーの解説者が、オーセールスのチームの対戦相手に関していう]

Le prochain **client** d'Auxerre en Champoinnat d'Europe sera d'une toute autre trempe. (ad loc.)

ヨーロッパ大会で、つぎのオーセールスの「お客さん」は格別によく鍛えられていますよ。

(3) [運送業者が仲間に、運んでいる家具に関していう]

Va falloir faire très gaffe, le prochain **client** coûte la peau de fesses ! (ad loc.)

うんと気をつけなきゃ。つぎの「お客さん」は目の玉がとびでるほど高いからな。

これらの例にみられる **client** は、たとえば商業的局面での顧客というような、指示対象の側の性質(これを Cadiot と Nemo は「内在的特性」(*propriété intrinsèque*) とよぶ)によって把握することはできない。ここでは **client** は、どの例においても「需要者」にはあたらないからである。

(1) の例では、「需要者」はむしろ、新聞や雑誌を買ってくれる読者であろうし、(2) では入場料をはらってサッカーを観戦する観客、(3) では引越しの発注者であろう。それどころか、**client** は、人間である必要もないし、生物である必要さえない。(3) では、つぎに運ぶ家具が **client** と名ざされているのである。「内在的特性」による記述が、どうしても失敗せざるを得ないゆえんである。

Cadiot たちは、そのかわりに、「外在的特性」(*propriété extrinsèque*) という概念を提唱する。「外在的特性」とは、ひとが指示対象とのあいだで取りむすぶ関係のタイプのことであり [(4)]。その「外在的特性」は、**client** に関していうと、「*qu'il faut prendre en charge*」(責任を負うべき(相手))、「*dont il faut s'occuper*」(世話をするべき / 関わり合いになるべき(相手)) のようにあらわすことができる。

(4) « Pour décrire un objet il faut décrire à la fois ses propriétés intrinsèques (désormais PI), propriétés néganthropiques, et le type de rapport que l'on entretient avec lui que nous appellerons propriétés extrinsèques (désormais PE) . Le terme de rapport étant défini ici comme la forme spécifique que prend le contact avec un objet. » 対象を記述するには、内在的特性 (PI)、すなわち人間が関わらない特性と、われわれが外在的特性 (PE) とよぶ、ひとが対象とのあいだにとりむすぶ関係のタイプの両方を記述しなければならない。

「関係」という辞項は、ここでは、対象とのあいだでの接触がとる特有の形として規定される。(ibidem, p.24) そして Cadiot らは、語の「意味」は外在的特性にこそある (« le « sens » d'un nom relève de ses PE », ibidem, p.25) という興味深い主張を提出する。外在的特性こそ、見かけ上の解釈の多様性を広くカバーでき、歴史的変遷に対しても安定している要素であると考えているのである。

3. アフォーダンス

Cadiot らの意味論は、Gibson がつぎのように定義しているアフォーダンス (*affordance*) の概念ともかかわりが深い。³⁾ アフォーダンスは、(5) の引用に見られるように、環境が動物に「提供する」(*afford*) ものとして定義されるが、かといって環境に固有の特性ではなく、動物と環境とのあいだの相補性 (*complementarity*) と形容される関係から出てくるものである。

(5) « The affordances of the environment are what it offers the animal, what it provides or furnishes, either for good or ill. The verb *to afford* is found in the dictionary, but the noun *affordance* is not. I have made it up. I mean by it something that refers to both the environment and the animal in a way that no existing term does.

It implies the complementarity of the animal and the environment. »

(Gibson 1979, p.127)

(6) の引用に見られるように、アフォーダンスは動物との関わりでの環境の特性である。たとえば深い水は、水棲動物には泳ぐ（潜る）ことをアフォードするが、多くの陸棲動物には溺れることをアフォードする。

(6) « I assume that affordances are not simply phenomenal qualities of subjective experience (tertiary qualities, dynamic and physiognomic properties, etc.). I also assume that they are not simply the physical properties of things as now conceived by physical science. Instead, they are ecological, in the sense that they are properties of the environment *relative to* an animal. » (Gibson 1982, p. 404, 強調原著)

Cadiot らのいう内在的特性と外在的特性の弁別は、(7) の引用にみられるように、Gibson のいう物理学的物理学 (physical physics) と生態学的物理学 (ecological physics) の弁別とも相通じる。

(7) « The object offers what it does because it is what it is. To be sure, we define what it is in terms of ecological physics instead of physical physics, and it therefore possesses meaning and value to begin with. »

(Gibson 1986, p.139)

言語学へのアフォーダンスの応用は本多 (2003) (2013) の功績であるが、いまなお個別言語に即した議論はつくされていない。

筆者はこれまで、渡邊 (2012) (2013 b) (2014 a) (2014 b) (2015 d) (2015 e) など、おもに動詞論の方面からフランス語の認知モードを研究し、中村 (2009) のいう「Iモード」(Interactional mode of cognition、すなわち主体が四囲の環境との相互作用にもとづいておこなう認知の態様) 的な性質が濃厚であることを主張してきた。⁴⁾ 「Iモード」は、その定義からして、アフォーダンスと関係が深いといえる。

以下では、フランス語は名詞などの語彙に関してもアフォーダンスとの親和性が高いことを示してゆきたい。

4. フランス語の名詞とアフォーダンス

まず名詞 *créneau* について検討する。辞書、先行研究では以下のような用法分類が一般的である。

A. (城や要塞の) 狭間、銃眼。

(8) Les **créneaux** du château fort permettaient à ses défenseurs de tirer sur l'ennemi en restant à l'abri.

城砦の狭間は、防戦者が隠れたまま敵を撃つことを可能にするものだった。

(Lehmann et Martin-Berthet 1998, p.75)

B. 駐車スペース。

(9) Je fais un **créneau** pour garer ma voiture. (ad loc.) わたしは車を縦列駐車する。⁵⁾

C. 空き時間。

(11) trouver un **créneau** dans son emploi du temps (*Grand Robert*) スケジュールの中に空き時間を見つける

D. [商業] 新市場、未開拓分野。

(12) Cet industriel a trouvé un bon **créneau**, ce qui lui permet d'exporter. (Lehmann et Martin-Berthet, ad loc.)

その実業家は、よい新市場を見つけた。そのことによって、輸出できるようになった。

辞書などでは上記のような意味分類がなされるが、実際の用例をみると、**créneau** という語があらわしているのは、D の用法では商圏だけでなく、(13)(14) では「ある組織が活動しうる範囲」といった意味、C の用法においても空き時間だけではなく、(15) では「音韻変化が起きうる時期」のような意味であり、さし示される事物の性質に応じ、柔軟に変化しうる抽象的・操作的な意味である。

(13) Depuis dix ans, plusieurs associations se sont spécialisées dans le **créneau** de « soutien psychologique » aux chômeurs. (Le Monde)

10年来、いくつもの団体が、失業者にたいする「心理的な支え」という部門を専門とするようになった。

(14) Le sport est un domaine dans lequel les départements et les régions n'ont pas encore véritablement trouvé leur **créneau** spécifique d'intervention. (Le Monde)

スポーツは、県や地方 (の行政) が、独自に介入しうる範囲をいまだに見つけられないでいる分野である。

(15) Pourtant, ce changement est limité dans le temps ; il a un **créneau**, et en dehors de ce **créneau**, les occlusives vélares ne subissent plus la palatalisation. (Smith 1995, p.54)

しかしながら、この (音韻の) 変化は時間的に限定されている。「狭間」があり、その「狭間」をはずすと、軟口蓋閉鎖音は硬口蓋化をこうむらない。

このような意味の可塑性にかんがみ、フランス語意味論では、文脈におかれることによってさまざまな結果的解釈を生み出す祖型として想定できる図式を、ある表現の「本質的意味」として探求しようとすることが多い。⁶⁾ **créneau** に関してはつぎのような図式が想定できる。

(16) **créneau** の本質的意味 : 「一定の行為を可能とするために空けられた空隙・間隙」

(16) の図式を祖型として、戦争や城砦について語る文脈におかれたときは A、駐車場の文脈では B、時間が問題になるときは C、社会的な活動に関わるときは D の解釈が生まれる。この本質的意味では、なんらかの行為をするひとと対象との関わりが問題になっており、外在的特性、アフォーダンスのひとつのあり方である。

つぎに、フランス語の複合名詞のなかで大きな位置を占める動詞由来複合名詞⁷⁾を検討する。つぎの表2をご覧ください。

表 2：フランス語の動詞由来複合名詞と他言語の比較

フランス語	イタリア語	スペイン語	ポルトガル語	ルーマニア語	英語	日本語
coupe-papier 「紙を切る」	tagliacarte	cuchillo de papel	cortador de papel	cuțit de hârtie	paper knife	ペーパーナイフ
essuie-tout 「すべてを拭く」	rotolo da cucina	toalla de papel	papel-toalha	prosop de hârtie	paper towel	キッチンペーパー
garde-fou 「狂人を守る」	ringhiera	barandilla	grade	balustradă	balustrade, handrail	柵、欄干
passe-partout 「どこでも通る」	chiave master	llave maestra	chave mestra	cheie principală	master key	マスターキー

passee-partout の語形成は、「いたるところを (partout) 通る (passer)」というふたつの記号素の合成からなり、字義的には、マスターキーの機能・用途を端的にあらわしているものの、それ以外のことはあえて示していないといえる。それに対して、イタリア語 chiave master、スペイン語 llave maestra、ポルトガル語 chave mestra、英語 master key は、それが「鍵」であることを明示しており、指示対象となる実体がなにであるかを指定しているという点がフランス語と異なる。

coupe-papier についても、フランス語は単に「紙を (papier) 切る (couper)」という機能・用途のみを示している。「ナイフ」にあたる記号素が含まれていないことで、それがなにであるかを言っていないだけでなく、紙を切る「もの」、紙を切る「道具」とさえ言っておらず、実体の支えが一切ない。⁸⁾

さらにおどろくべき例は、essuie-tout である。「紙」であることを示さないばかりか、単に「なんでも (tout) 拭く (essuyer)」とだけ述べているだけであり、機能・用途を示しているとはいえるかもしれないが、あまりにも漠然としていて、字義だけではなかなか指示対象までたどり着くことができないほどに「決定不全」(sous-déterminé) である。

フランス語のこれらの語は、「それがなんであるか」(材質など、対象に固有の性質) を示す指示的機能 (fonction référentielle) をほとんど犠牲にして、もっぱら、「それでなにをするか」(用途、機能) を示す、ある種の記述的機能 (fonction descriptive) に特化している。

この記述的機能は、アフォーダンスに対応する。coupe-papier は紙を切ることをアフォードし、passee-partout はどこでも通ることをアフォードし、essuie-tout はなんでも拭くことをアフォードする。

ここで、2. で見た Cadiot らによる client に関する記述、「qu'il faut prendre en charge」、「dont il faut s'occuper」を日本語に訳するとき、もとのフランス語ではいずれも関係節のみで示されていたのに、「責任を負うべき (相手)」、「世話をするべき / 関わり合いになるべき (相手)」というように、「相手」という語をおぎなつたことを思いおこそう。そこでもまた、フランス語では関係節に象徴されるような「特徴づけ」(caractérisation) を示すにとどめる傾向があるのに対して、日本語では「実体への指示」(référence aux entités) による支えが必要となる傾向がある。Cadiot らによる関係節のみでの名詞の記述は、決して特異な例ではなく、辞書などによる名詞の語義説明でも、関係節のみでの提示は多く見

られる。関係節のみでの名詞の記述は、形容詞の定義のしかたと同じである（もちろん、形容詞には指示的機能はなく、記述的機能のみをもつ）。このことは、つぎの表3で見るように、フランス語で名詞と形容詞を兼任する語彙が多い⁹⁾ こととも軌を一にする。

表3：フランス語における名詞 (n)・形容詞 (a) の兼任と、他言語との比較（太字の語が兼任）

フランス語	イタリア語	スペイン語	ポルトガル語	ルーマニア語	英語	日本語
dynamique (n, a)	dinamica (n)	dinámica (n)	dinámica (n)	dinamică (n)	dynamics (n)	力学 (n)
imperméable (n, a)	impermeabile (n, a)	impermeable (n, a)	capa de chuva (n)	pelerină de ploaie (n)	raincoat (n)	雨合羽 (n)
joueur (n, a)	giocatore (n)	jugador (n, a)	jogador (n, a)	jucător (n)	player (n)	選手 (n)
meuble (n, a)	arredamento (n)	mueble (n, a)	móvelia (n)	mobilă (n)	furniture (n)	家具 (n)
sérieux (n, a)	serio (n, a)	seriedad (n)	sério (n, a)	seriositate (n)	seriousness (n)	真剣さ (n)

5. フランス語の形容詞とアフォーダンス

フランス語の形容詞には、さらにアフォーダンス的な性格が濃厚な語がある。以下に見る事例では、同様のアフォーダンスをもつ場としての状況・環境に関わっているとき、その状況のなかで認知活動をおこなう主体側から見た場合も、認知や知覚の対象側から見た場合も、ときにはどちらに属するものでもない事態に対しても、同じ語彙を用いている。¹⁰⁾

sourd という形容詞は、「耳の聞こえない」という、ひとをさす意味と、「音の響かない」という、認知対象をさす意味の両方がある。

- (17) La question des adultes devenus **sourds** ou malentendants n'est pas marginale, de nombreuses personnes sont concernées. (Émile Ernst, *Quand l'adulte devient sourd*)

聾や難聴になる大人の問題は周縁的なものではなく、多くのひとたちが関係することである。

- (18) Les auditeurs éloignés entendent mal. Une grande salle **sourde** ne peut pas convenir pour l'écoute de la musique [...]. (Ville de Clermont-Ferrand, *Orphée en Auvergne*)

遠くの観客はよく聞こえない。大きな無音室は、音楽を聴くには適していない。

さらに、「鈍い騒音」のように、明瞭には聞きづらい音をさすにも用いられる。

- (19) La pénombre le dissimulait, la rumeur **sourde** des vaches qui rumaient dominait le bruit de sa respiration précipitée [...]. (Louis Pergaud, *Les Rustiques, nouvelles villageoises*)

うす暗がりがある彼の姿を隠した。反芻する牝牛たちの鈍いうめき声が、彼の速い息の音を圧倒していた。

これらの例からわかるように、「音が聞こえない」ことをアフォードする環境ないし状況全体を想定して、その環境・状況に属する主体、対象、事態をあらわす名詞をいずれも **sourd** という形容詞で修

飾することができる。

形容詞 *aveugle* にも、「目の見えない」とならず、「光を通さない」という意味もある。

(20) *Il était marié, mais il n'avait pas d'autre enfant qu'une fille, aveugle de naissance.*

(Colette Estin, *Contes et fêtes de la mort*)

彼は結婚していたが、子どもは生まれつき盲目のひとりの娘しかいなかった。

(21) *La veillée s'organisait derrière les rideaux aveugles.* (Patrice Delbourg, *La Martingale de d'Alembert*)

夜会は遮光カーテンの奥で催されていた。

(22) *On s'est retrouvés dans un couloir aveugle qui filait vers une porte lumineuse. On a avancé, attirés par cette lumière comme des chauves-souris par un lampadaire.* (Eric Gilberh, *Les perce-oreilles*)

わたしたちは、明るい扉に向かって続く真つ暗な廊下で落ち合った。わたしたちはコウモリが街灯にひきつけられるように、その光にひきつけられて進んだ。

とくに (22) では、視界が暗闇でおおわれている状況に対象 *couloir* (廊下) を位置づけるために形容詞 *aveugle* が用いられている。主体と対象が含まれるその状況がアフォーダンスを構成し、*aveugle* の使用を支えている。

形容詞 *bête* は、ひとに関していう「おろかな」という意味をもつ。

(23) *Mais, vois-tu, on me dit toujours que je suis bête, et cela me trouble; je ne sais plus ce que je fais, surtout quand ce maudit Jacquot se met à m'insulter.* (Comtesse de Segur, *La soeur de Gribouille*)

でも、わかるでしょう、みんなわたしのことをばかだというので、わたしは困っているの。わたしはどうしていいかわからなくなるの。とくにあのどうしようもないジャコーがわたしを罵るときは。

しかし、(24) のように *bête comme chou* というと、問題などの抽象的なものに関して「とてもたやすい」という意味になる。一方、(25) のようにひとを主語とするとこの表現は現代では不自然である。

(24) *Cette { tâche / histoire } est bête comme chou.* (Srповá 1991, p.38) この問題はとても簡単だ。

(25) *? Paul est bête comme chou.* (ad loc.) ?ポールはとても簡単だ。

bête がひとの知能 (の不足) に対してだけでなく、(*bête comme chou* という形であれ) 思考の対象についても用いることができることは、やはりアフォーダンス的現象である。

一部の形容詞は、表面的には関係する名詞を修飾しているようでも、なにほどかは認知主体の裡に生じる心情を示している。(26) では、「悲しい」のは「風景」ではなく、その風景を認知する主体である。また (27) では、「かわいい」のは「幼い子どもたち」であるが、それに関わる仕事も「かわいい」と形容される。こうした場合、主体がいだく感情が、共有された場を介して対象に投影されたり、さらに対象間で転移したりすることから、アフォーダンス的な現象であると考えられる。¹¹⁾

(26) *Ça c'est, pour moi, le plus beau et le plus triste paysage du monde.* (Saint-Exupéry, *Le petit prince*)

これがわたしにとっては、世界でいちばん美しく、いちばん悲しい風景です。

(27) C'est un rôle d'éducateur auprès des tout petits de zéro à trois ans. — C'est **mignon** ça. (水落 2015, p.8)

0歳から3歳までの幼い子どもたちの教育係の仕事です。— それはかわいいいね。

6. おわりに

以上、本稿では、フランス語の語彙意味論にとって、アフォーダンスの概念がきわめて関与的であることを示してきた。このことは、3. でのべた、動詞論の方面でフランス語が「Iモード」的な言語であることと軌を一にしており、今後、フランス語全般に関する議論へと拡張しうる可能性がある。

註

1) 本稿は、科学研究費 (JSPS Kakenhi) 基盤研究 (C) 課題番号 25370422 (研究代表者: 渡邊淳也)、同 17K02804 (研究代表者: 和田尚明)、基盤研究 (B) 課題番号 18H00667 (研究代表者: 山村ひろみ) の助成を得て遂行された研究の成果の一部である。

2) とりのぞかれた語の例として、つぎのような例をあげることができる。「フランス語で「耳のきこえぬ」は *sourd* で、その名詞は *surdité* ですが、「目の見えぬ」は *aveugle* でその名詞は *cécité* になります。これはラテン語では *surdus, surditas; caecus, caecitas* と対になっているのですが、フランス語の形容詞は「目を奪われた」*ab oculis (oculus > oeil)* という複合的な言い方から出たためです。フランス語ではかつては *sourd* から *sourdesse* という語もあり *aveuglerie, aveuglement, aveugleté* などの語もあったのですが、17世紀中頃までには整理されてしまい、[中略] *aveuglement* は「理性が乱れて無分別になること」の意味で残っています。」(松原 et 松原 1967, p.142; 下線引用者)

3) 詳細については、Gibson (1979) (1982) (1986)、河野 (2003) (2005)、佐々木 (1994) (2008) を参照。

4) 端的な例をひとつだけあげる。

(i) 国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。(川端康成『雪国』の劈頭)

(ii) *The train came out of the long tunnel into the snow country.* (Edward Seidensticker による英訳)

(iii) *Un long tunnel entre les deux régions, et voici qu'on était dans le pays de neige.* (藤森文吉、Armel Guerne による仏訳)

(i) の文は、上越線の清水トンネルを上州側から越後側へとぬける汽車のなかからみた眺望をのべる、きわめてIモード (*interactional mode of cognition*) 的な文であるが、(ii) の英訳ではその点は一変し、*the train* を主語にたてることにより、それを外在的に、いわば神の視点からながめるDモード (*displaced mode of cognition*) の文になっている。それに対して、(iii) の仏訳は、前半を名詞句のみで処理し、後半を直示語 *voici* ではじめるなど、Iモード的な臨場感を重視しており、あたかも日本語に寄りそってきているかのように感じられる。

5) 実は、単に *Je fais un créneau.* というだけでも、「わたしは車を縦列駐車する」という意味になる。

6) 「本質的意味」に類する概念は、呼称こそさまざまであるが、意味論の多くの研究においてもちいられている。一部をあげると、「一次的機能 (*fonction primaire*)」(De Boer 1954, 佐藤 1990), 「図式的形態 (*forme schématique*)」(Culioli 1990, pp.115-134), 「潜勢的能記 (*signifié de puissance*)」(Guillaume 1964, Picoche 1995), 「ラングにおける価値 (*valeur en langue*)」(Gosselin 2005, p.159) などである。

7) Corbin (1992)、Villoing (2003)、川口 (1993)、高田 (1997) (2005) を参照。

8) フランス語の名詞における記述的機能の卓越については、さらに渡邊・ルボー (2017) で提示した名詞・形容詞 *sujet* の記述ならびに日本語との対照研究を参照されたい。

9) 工藤 (2008, p.8) は「名詞が省かれると残った形容詞が名詞の様相をおびる。La capitale 首都、は la (ville) capitale 主なる都。Le principal 校長、は le (maître) principal 主席教師、la marine 海軍 / 航海術、は l'(armée) marine / la (navigation) marine 海軍 / 航海術、le quotidien 日刊、は le (journal) quotidien 日刊 (新聞)。La présidentielle = l'élection présidentielle 大統領選挙 ...」のように、名詞が省略された結果形容詞が名詞を兼任すると考えているようであるが、本稿においては表3の *joueur, meuble, sérieux* などではかならずしも関係する名詞が存在するわけではないと考える。

10) ここでいう主体・対象・状況 (環境) は、Langacker (1985) (1990) (1991)、中村 (2009) が用いているのと同様の概念である。「状況」は、現実的には主体と対象がつねに共有している場であり、たとえ「神の視点」をとって客観的に述べるときでさえ、主体はあくまでも擬制的に状況から離脱しているにすぎない。

11) triste, mignon のこうした性質は、日本語の「悲しい」、「かわいい」にもみられるので、フランス語 (のみ) の特性ではないというご指摘を査読者からいただいた。たしかにその通りであるが、ここでは詳細は論じられないものの、日本語もアフォーダンス的な性格が比較的濃厚な言語であると考えている。

参考文献

- Cadiot, Pierre et François Nemo (1997) : « Pour une sémiogenèse du nom », *Langue française* 113, pp.24-34.
- Corbin, Danielle (1992) : « Hypothèses sur les frontières de la composition nominale », *Cahiers de grammaire* 17, pp.26-55.
- Culioli, Antoine (1990) : *Pour une linguistique de l'énonciation*, 1, Ophrys.
- Culioli, Antoine (1999 a) : *Pour une linguistique de l'énonciation*, 2, Ophrys.
- Culioli, Antoine (1999 b) : *Pour une linguistique de l'énonciation*, 3, Ophrys.
- De Boer, Cornelis (1954) : *Syntaxe du français moderne*, Presses Universitaires de Leyden.
- Gibson, James J. (1979) : *The Ecological Approach to Visual Perception*, Laurence Erlbaum.
- Gibson, James J. (1982) : *Reasons for Realism: Selected Essays of James J. Gibson*, Laurence Erlbaum.
- Gibson, James J. (1986) : *The Ecological Approach To Visual Perception*, Routledge.
- Gosselin, Laurent (2005) : *Temporalité et modalité*, Duculot.
- Guillaume, Gustave (1964) : *Langue et science du langage*, Nizet.
- 春木仁孝 (2011) : 「フランス語の認知モードについて」『言語における時空をめぐる』(大阪大学) 9, pp.61-70.
- 春木仁孝 (2012) : 「フランス語における事態の認知方策について」『言語文化研究』(大阪大学) 38, pp.45-65.
- 本多 啓 (2003) : 『アフォーダンスの認知言語学』東京大学出版会.
- 本多 啓 (2009) : 「他者理解における「内」と「外」」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編) : 『「内」と「外」の言語学』開拓社, pp.55-97.
- 本多 啓 (2013) : 『知覚と行為の認知言語学』開拓社.
- 池上嘉彦 (1981) : 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 川口裕司 (1993) : 「言語記号としての複合名詞」『人文論集』静岡大学, 43, 2, pp.65-86.
- 河野哲也 (2003) : 『エコロジカルな心の哲学』勁草書房.
- 河野哲也 (2005) : 『環境に広がる心』勁草書房.
- 工藤 進 (2008) : 『文法の復権—現代印欧語批判』無明舎出版.
- Langacker, Ronald W. (1985) : « Observations and Speculations on Subjectivity », John Haiman (éd.) : *Iconicity in Syntax*, John Benjamins, pp.109-150.
- Langacker, Ronald W. (1990) : « Subjectification », *Cognitive Linguistics*, 1, 1, pp.5-38.
- Langacker, Ronald W. (1991) : *Foundations of Cognitive Grammar*, 2, Stanford University Press.
- Lehmann, Alise et Françoise Martin-Berthet (1998) : *Introduction à la lexicologie*, Nathan.
- 松原秀治 et 松原秀一 (1967) 『仏作文の考え方』第三書房.
- 水落理子 (2015) : 「フランス語形容詞 joli と mignon の意味的比較」『筑波大学フランス語フランス文学論集』30, pp.1-10.
- 水落理子 (2016) : 「フランス語形容詞 adorable に関する一考察」『筑波大学フランス語フランス文学論集』31, pp.1-14.
- 仲本康一郎 (2000) : 「アフォーダンスに基づく発話解釈 : 「行為の難易度」を表す形容詞文」『語用論研究』2, pp.50-64.
- 中村芳久 (2009) : 「認知モードの射程」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編) : 『「内」と「外」の言語学』開拓社, pp.353-393.
- Noailly, Michèle (1999) : *L'adjectif en français*, Ophrys.
- Picoche, Jacqueline (1995) : *Etude de lexicologie et dialectologie*, Conseil international de la langue française.
- Richard-Favre, Hélène (2006) : « La notion de vie dans la Stylistique de Charles Bally », *Съпоставително езикознание* (Софийски университет „Св. Климент Охридски“), 2, pp.1-10.
- 佐々木正人 (1994) : 『アフォーダンス 新しい認知の理論』岩波書店.
- 佐々木正人 (2008) : 『アフォーダンス入門 知性はどこに生まれるか』講談社.

- 佐藤房吉 (1990): 『フランス語動詞論』 白水社。
- Smith, John Charles (1995): « L'évolution sémantique et pragmatique des adverbes déictiques *ici, là et là-bas* », *Langue française*, 107, pp.43-57.
- Srpová, Milena (1991): « À propos des locutions comparatives en FLE », *L'Information Grammaticale* 48, pp. 36-40.
- 占部匡美 (2011): 「日本語教育史における入門期教科書の基礎語彙 I」『福岡国際大学紀要』 25, pp.81-87.
- 高田晴夫 (1997): 「合成法の占める位置と役割」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える』三修社, pp.241-263.
- 高田晴夫 (2005): 「フランス語語形成論の新しい視点」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を探る』三修社, pp.279-292.
- Villoing, Florence (2003): « Les mots composés VN du français : arguments en faveur d'une construction morphologique », *Cahiers de Grammaire*, 28, pp. 183-196.
- 渡邊淳也 (2004): 『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社。
- 渡邊淳也 (2006): 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法との対照研究」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 50, pp.41-84.
- Watanabe, Jun-ya (2006): « Addition quantitative, addition qualitative et la locution non seulement », Kawaguchi, J. et alii (éds.) *Cognition et émotion dans le langage*, Centre de recherche interdisciplinaire sur le langage (Université Keio), pp.191-205.
- 渡邊淳也 (2007 a): 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法」『フランス語学研究』 41, pp.54-59.
- 渡邊淳也 (2007 b): 「間一髪の半過去をめぐって」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 52, pp.151-175.
- 渡邊淳也 (2008): 「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 54, pp.15-44.
- 渡邊淳也 (2009 a): 「時制とモダリティの連関への新たな接近法」『フランス語学研究』 43, pp.77-83.
- 渡邊淳也 (2009 b): 「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 55, pp.123-144.
- 渡邊淳也 (2011): 「ジェロンディフと現在分詞について」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 60, pp.121-181.
- 渡邊淳也 (2012): 「叙想的時制と叙想的アスペクト」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 61, pp.191-234.
- 渡邊淳也 (2013 a): 「単純未来形と迂言的未来形について」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 62, pp.69-106.
- 渡邊淳也 (2013 b): 「主語不一致ジェロンディフについて」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 63, pp.95-178.
- 渡邊淳也 (2014 a): 『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社。
- 渡邊淳也 (2014 b): 「叙想的時制、叙想的アスペクトと認知モード」春木仁孝・東郷雄二(編)『フランス語学の最前線』 2, ひつじ書房, pp.177-213.
- 渡邊淳也 (2014 c): 「En attendant について」『フランス語学研究』 48, 85-93.
- 渡邊淳也 (2014 d): 「前未来形のモダールな用法について」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 66, pp.35-56.
- 渡邊淳也 (2015 a): 「Ceci dit, cela dit について」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 67, pp.99-120.
- 渡邊淳也 (2015 b): 「Essuie-tout の意味論」『外国語教育論集』(筑波大学) 37, pp.75-88.
- 渡邊淳也 (2015 c): 「論証的ポリフォニー理論をめぐって」川口順二(編)『フランス語学の最前線』 3, ひつじ書房, pp.275-304.
- 渡邊淳也 (2015 d): 「主語不一致ジェロンディフと認知モード」『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会) 107, pp.155-169.
- Watanabe, Jun-ya (2015 e): « Gérondif non-coréférentiel », *Voix plurielles*, 12, 1, pp.207-224.
- 渡邊淳也 (2016): 「En passant の文法化・語用論化について」大久保朝憲ほか(編)『パロールの言語学』, 日本フランス語学会, pp.153-167.
- 渡邊淳也 (2017 a): 『ジェロンディフと現在分詞の意味論・語用論』デザインエッグ。
- 渡邊淳也 (2017 b): 「フランス語および西ロマンス諸語における「行く」型移動動詞の文法化について」早瀬尚子・天野みどり(編)『構文と意味の拡がり』くろしお出版, pp.223-245.
- 渡邊淳也 et ダニエル・ルボー (2017): 「フランス語の sujet および対応する日本語の研究」青木三郎(編): 『フランス語学の最前線』 5, ひつじ書房, pp.1-29.